

森林環境教育について

中部森林管理局名古屋分局

指導普及第二課 技術開発主任官 牧戸祥光

1. 課題を取り上げた背景

平成12年2月の中央林政審議会の答申で、「今後の森林の新たな利用の方向」として、国民が森林と豊かな関わりを持つことによって21世紀型の森林文化を創造し、環境との調和や資源の循環利用を図る新たな社会の構築に寄与していく観点から、森林環境教育、森林づくりへの国民の直接参加など森林の新たな利用を推進していく必要があること。

平成13年7月には林業基本法が改正され「森林の有する多面的機能の発揮」として、森林については、国土の保全、水源のかん養、自然環境の保全、公衆の保健、地球温暖化の防止、林産物の供給等の多面にわたる機能が持続的に発揮されることが国民生活及び国民経済の安定に欠くことのできないものであることに鑑み将来にわたって、適正な整備・保全が図られることが必要だと提言されました。

このような背景を踏まえ、平成14年4月から小中学校において導入される「総合的な学習の時間」に、森林環境教育を取り入れるよう、子どもたちを教える立場にある教職員に対して森林の重要性を認識し、教育への体系的なカリキュラムづくりを進めていただくための研修会として取り組みました。研修の進め方として、森林林業の役割・重要性、森林環境教育プログラムの企画、森林環境教育プログラムの実践を中心としました。

2. 業務改善の経過

今年度の名古屋分局のアクションプログラムとして東三河地方の豊橋市、豊川市及び新城市の小学校の先生18名を対象に関係する教育委員会の協力を得て実施しました。研修期間は、夏休み期間である8月6日から8日までの3日間の日程で実施しました。実施場所は愛知森林管理事務所管内の段戸国有林をフィールドとして使用しました。

研修生は、豊橋市、豊川市、新城市の3市で18名となっており、内訳は表—1のとおりとなっています。研修会を実施するに当たり、教職員にどういったことを理解してもらおうか。ア森林林業の役割・重要性、イ森林環境教育プログラムの企画、ウ森林環境教育プログラムの実践手法を踏まえ、名古屋市西区の木文化研究所所長の水野氏をコーディネータとして研修のカリキュラムを作成して実施することとしました。

その内容としては、①森林の働き（森林と地球環境）及び②森林環境教育の展開（森林環境

表—1

研修生はどこからきたか		
・市別では		
豊橋市	7校	7名
豊川市	7校	7名
新城市	1校	4名
・年齢では		
		20歳代10名
26歳から49歳	30歳代3名	計18名
		40歳代5名

教育プログラムの企画)について、水野木文化研究所長に実施していただき、③森林環境教育の実践手法(森を育てる・森林生態の見方・森林の野鳥観察・木工クラフト・ネイチャーゲーム・森の食材を学び味わう)について豊橋高等学校の中西氏、東三河野鳥同好会長皿井氏、トヨハシ・ランパーメン・クラブの大竹氏、愛知県木材青壮年団体連合会の岡本氏及び愛知森林管理事務所の協力を得て実施しました。

写真1

森林の働きでは、森林と地球規模の環境問題を、私たちの身近に存在する森林から、地球規模の環境問題を考えるとして、気になる環境問題を研修生から提出してもらい(写真1)、ア水資源、イ温暖化、ウゴミ問題の3つのグループ分けを行い、このグループ毎のテーマによって森へ調べに行き、「総合的な学習の時間」で子どもたちに教えるためのプログラム作りを実施し、研修最終日において作成したプログラムの内容について発表を行ないました。

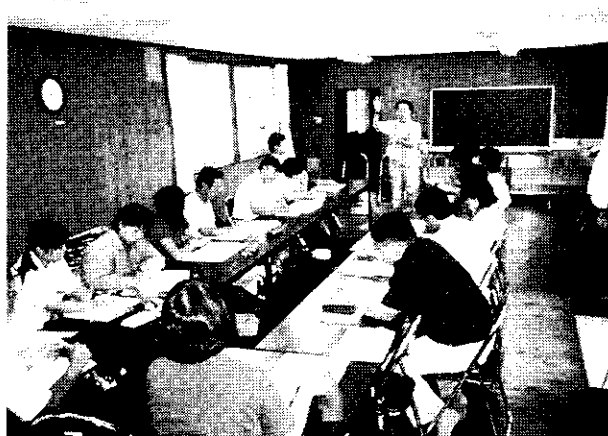


写真2

森林環境教育の実践では、森を育てるとして段戸国有林のヒノキ人工林において、間伐作業を体験してもらい、間伐の重要性について理解を深めることができました。野鳥観察は前日にスライドを活用して、野鳥の名前を鳴き声を交えながら説明を受け、翌日の早朝に段戸原生林において、姿・鳴き声がいくつ観察できるかを目標としました。森林生態では段戸原生林において自然林の見方を観察しました。また、森の食材を学び味わうでは食材探しには苦労しましたが、皆で協力しあい、変わり五平餅をそれぞれ作りグループ別に審査(写真2)を行い、お互いの出来映えを競いました。



3. 実行結果

2泊3日の研修について、研修会最終日にアンケートをお願いして感想を頂戴した。森林環境教育プログラムの企画では、内容的に事前にテーマを決め、フィールドでのネタさがしとなったことから、プログラム作りに手間取った。事前にフィールドでの森林散策、野鳥観察、森林生態の見方を済ましてからの方がプログラムの企画が容易にできるのではないかと。また、内容が盛りだくさんであり、時間的に厳しく最終目標である子どもたちに体験させるためのプログラムづくりが未完成となったが、普段の研修では一方的な受講であるが、今回は自分たちでテーマを絞って研修を進めていくスタイルは初めてであり良い体験になった。また、同様の研修会があればまた参加したい。との感想がありました。

なお、研修終了後2ヶ月程経過した時点においてアンケートを実施し、講義内容を生かした

授業への取り組み状況の問いに、森林環境をテーマとした授業は行われていない状況であり、今後の予定では、校内の樹木園等を利用した自然観察や教科の中にある「自然の中の水」で森林環境について取り組むとの感想であるが、新年度の総合学習の場において取り組んでいきたいとの感想が多数を占めた。

4. 考 察

今回、小中学校において「総合的な学習の時間」の中に森林環境教育の時間を導入することにより、子どもたちが地球環境を良くするためには何が必要か、森林を通じて分かりやすく指導できるカリキュラムづくりが必要です。子どもたちに森林教室等で話を行うことはもちろん、学校教育の中で理解を深めるには、まず教える立場にいる教職員の方が現地において目に触れ、手に触れる等体験を通じて森林の働き等を理解していただく事が大切です。

今後、より多くの教職員が参加できる研修づくり、先生方が取り組みやすいカリキュラムづくり、子どもたちに心にのこるプログラムづくりを通して、森林が持つ多面的な機能が地球環境に優しいかを、子どもたちが森林での体験を通して学ぶことができるような研修会を組んで行きたいと考えています。